

わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第177号

イザヤ 65:1

平成22年6月25日

私は見た。小羊が第六の封印を解いたとき、大きな地震が起こった。そして、太陽は毛の荒布のように黒くなり、月の全面が血のようになった。そして天の星が地上に落ちた。それは、いちじくが、大風に揺られて、青い実を振り落とすようであった。天は、巻き物が巻かれるように消えてなくなり、すべての山や島がその場所から移された。地上の王、高官、千人隊長、金持ち、勇者、あらゆる奴隷と自由人が、ほら穴と山の岩間に隠れ、山や岩に向かってこう言った。「私たちに上へ倒れかかって、御座にある方の御顔と小羊の怒りから、私たちをかくまってくれ。御怒りの大いなる日が来たのだ。だれがそれに耐えられよう。」ヨハネの黙示録 6:12-17

いちじくの木から、たとえを学びなさい。枝が柔らかくなって、葉が出て来ると、夏の近いことがわかります。そのように、これらのことのすべてを見たら、あなたがたは、人の子が戸口まで近づいていると知りなさい。まことに、あなたがたに告げます。これらのことが全部起こってしまうまでは、この時代は過ぎ去りません。この天地は滅びます。しかし、わたしのことばは決して滅びることがありません。 マタイ 24:32-35

先月号では、キリストが十字架刑にかかれる直前にオリーブ山で語られた終末預言について考察しました。キリストが栄光を帯びてこの地上に戻ってこられる再臨のとき、かつてない天変地異が伴われることを、ヘブル語（旧約）聖書の預言者たちは異口同音に預言しています。新約聖書では、ヨハネがキリストから受けた啓示の「第六の封印」がこの出来事に相応します。神の「御怒りの大いなる日」の預言です。全人類に対するこの裁きの日は、神を信じない者には、神の怒りから守られるなら山や岩が自分の上に崩れかかるほうがよいと願うほどの恐ろしい日になります。しかし、神を信じる者には約束が完全に成就する栄光の時代の到来です。キリストがこの世を去られた直後の初代教会の時代から、この贖いの日の到来が待ち望まれてきました。果たしてこの日が近づいたことを、私たちはどのようにして知ることができるのでしょうか。キリストは、この終末末期の訪れの大いなるしるしを「いちじくの木のとえ」を通して語られました。

西暦三十二年キリストがエルサレムに入城された翌日「ニサン月の十一日」、空腹を覚えられたキリストは、葉が茂っているのに実がない道端のいちじくの木を憤られ、裁きを宣告されました。そのため、そのいちじくの木が直ちに枯れるという驚くべきことが起こりました。このキリストの預言的行為は、真の神を忘れ、上辺だけの宗教儀式を営んでいたユダヤ人とエルサレム神殿に下る裁きの宣告で、このことは、70CEに現実のこととなったのです。エルサレム神殿崩壊、ユダヤ人宗教的指導者の滅びが起こったのです。しかし、この預言的行為の後、キリストは同時に「もし、あなたがたが、信仰を持ち、疑うことがなければ、いちじくの木になされたようなことができるだけでなく……信じて祈り求めるものなら、何でも与えられます」（マタイ 21:21-22）と、信仰の祈りが更なる神の奇蹟的なご介入を可能にすることを示唆されました。キリストはこの衝撃的な預言的行為に引き続き、翌日の午後のオリーブ山での説教のとき、世の終わりの前兆や主の再臨に関する弟子たちの質問に答えられた後「いちじくの木から、たとえを学びなさい」と、前日、裁きを宣告され一瞬のうちに枯れてしまったいちじくの木に再び焦点を当てて驚くべきことを語られました。枯れたいちじくの木が再び芽吹くときが訪れるという預言です。いちじくに象徴されるイスラエル（ユダヤ人国家）が、エルサレム神殿陥落とともに全地に散らされ、国家としての存在が絶たれたように見える時期があること、しかし、枯れたいちじくが突然芽吹いて啞然とさせられるように、イスラエルも異邦人諸国の驚きの中、国家として突然興されるときが来るという預言でした。イスラエル国家復興は、四季が神の摂理によって訪れるように父なる神の定めるときに起こり、そのことが、ご自分の再臨が近づいたことのしるしであることを教えられたのです。

果たしてイスラエルは、1948年5月14日に国家として奇蹟的に復興し、今日に至っています。このイスラエル国家復興は、イザヤが「彼女は産みの苦しみをする前に産み、陣痛の起こる前に男の子を産み落とす。だが、このような事を聞き、だれが、これらの事を見たか。地は一日の陣痛で産み出されようか。国は一瞬にして生まれようか。ところがシオンは、陣痛を起こすと同時に子らを産んだのだ」（イザヤ書 66:6-8）と一瞬のうちに突然生み出される驚異として描写したように、まさにその通りの預言の成就となったのです。エゼキエルも「神である主はこう仰せられる。わたしの民よ。見よ。わたしはあなたがたの墓を開き、あなたがたをその墓から引き上げて、イスラエルの地に連れて行く……あなたがたを墓から引き上げるとき、あなたがたは、わたしが主であることを知ろう。わたしがまた、わたしの霊をあなたがたのうちに入れると、あなたがたは生き返る。わたしは、あなたがたをあなたがたの地に住みつかせる」（エゼキエル書 37:12-14）と、国家を失い、死んだ

ような状態のイスラエルの全家が、約束の地に戻され、定住するようになる日の到来を二千六百年前に預言しましたが、今日、70CE以来初めて、イスラエルの地にユダヤ人が定着、増加しているのです。

また、レビ記には「わたしはあなたがたの町々を廃墟とし、あなたがたの聖所を荒れ果てさせる……その地が荒れ果て、あなたがたが敵の国にいる間、そのとき、その地は休み、その安息の年を取り返す……地は、あなたがたがその住まいに住んでいたとき、安息の年に休まなかったその休みを取る……その地は彼らが去って荒れ果てている間、安息の年を取り返すために彼らによって捨てられなければならない、彼らは自分たちの咎の償いをしなければならぬ」（レビ記26:31-35、:43）と、ユダヤ人が神の掟を守らなければ咎の償いのため約束の地から追い出されること、ユダヤ人が住まないときは約束の地は荒れ果てた状態に置かれることが明確に記されていますが、実際、少数のユダヤ人が十九世紀末に約束の地（カナン之地、後にローマ人が「パレスチナ」と命名）に住み始めるまでは、だれも顧みることのない荒地だったのです。言うまでもなく、パレスチナ人が突然、地の権利を主張し始めたのはユダヤ人が荒地に水を引き、農耕作を始め、生計が見込める地に様変わりしてからでした。しかし「広い良い…乳と蜜の流れる地」は神の掟に従順な神の民のために備えられている地なのです。

キリストは、いちじくの木のとえを語られた後「これらのことが全部起こってしまうまでは、この時代は過ぎ去りません」（下線付加）と言われました。この御言葉は、人々がいちじくの木が芽吹き、葉が出始めたのを見た時代、世代はすべての預言が成就するまでは過ぎ去らないと解釈することができ、いちじくの木が芽吹きに象徴されたイスラエル国家復興がすでに実現し、発展している今日、すべての預言の成就是非常に近いということになります。32CEのキリストの受難と70CEにユダヤ人に起こった全国四散をゼカリヤはゼカリヤ書13章で「**剣よ。目をさましてわたしの牧者を攻め、わたしの仲間の人々を攻めよ……牧者を打ち殺せ。そうすれば、羊は散って行き、わたしは、この手を子どもたちに向ける**」と正確に預言しましたが、さらにそれ以降、人類史の最後にかけて起こることを引き続き「**全地はこうなる……その三分の二は断たれ、死に絶え、三分の一がそこに残る……**」と預言しています。この神の裁きのときには地の三分の二にも及ぶ者が滅ぼされ、残った者のうち精錬の火に耐えた者だけがメシヤの王国に入ることになるという恐ろしい艱難期の預言は、旧約の預言者の多くが預言しており、エレミヤはこの大艱難期を「**ヤコブにも苦難の時**」と呼びました。全聖書の預言を総括すると、この艱難期が今日非常に至近距離に迫っていると考えられますが、その前、あるいは、直前に起こるとみなされているのは「ゴグ、マゴグのイスラエル侵略」として知られているエゼキエル書38、39章の預言です。

エゼキエルの預言「**多くの日が過ぎて、あなた（ゴグ）は命令を受け、終わりの年に、一つの国（イスラエル）に侵入する。その国は剣の災害から立ち直り、その民は多くの国々の民の中から集められ、久しく廃墟であったイスラエルの山々に住んでいる**」の下線部がイスラエル国家復興によってすでに成就したとみなすなら、昨今の中東情勢やイスラエルの沖合に天然ガス、石油埋蔵が確認されたという最新ニュース等は、ゴグが率いる同盟諸国の大軍団が北からイスラエルに突然侵入し、略奪するというエゼキエルの預言の成就に格好の舞台を整えてきており、この出来事の実現が非常に近いことを思わされます。神がご介入されることによって、イスラエルはこの大軍団の攻撃には勝利を収めることとなりますが、その後、反キリストの台頭による大艱難の時期、神の怒りのクライマックスであるハルマゲドンの戦いへと人類史は加速度的にメシヤの時代に向かい、終結することになります。エゼキエルは「**メシェクとトバルの大首長であるマゴグの地のゴグ……ペルシャとクシュとプテも彼らとともにおり……ゴメルと、そのすべての軍隊、北の果てのベテ・トガルマと、そのすべての軍隊、それに多くの国々の民があなたとともにいる**」と、イスラエル侵略に加担する者に関して十以上の名を挙げています。古代名で記されている名を現代用いられている名に変えると、「メシェク」はトルコ、「トバル」はトルコ（カパドキアのトバル）、南ロシア、イラン、「マゴグ」は中央アジアとロシア、「ペルシャ」はイラン、「クシュ（エチオピア）」はエジプトの南、スーダン、「プテ」はエジプトの西、リビア、「ゴメル」はトルコ、「ベテ・トガルマ」（古代カルケミシュとハランの間）はトルコ、「大首長」と邦訳されているヘブル語「ロシュ」はロシアとなり、すべて今日のイスラム教国であることから、「多くの国々」もおそらくイラク、シリア、ヨルダン、エジプトなど近隣イスラム教国とみなすことができます。「ロシュ」を「大首長」ではなく、音声の類似から固有名詞のロシアと捉え、「トバル」をロシアのトボルク、「メシェク」をモスクワとみなすことによって「ゴグ、マゴグ」をロシアとする見解が一番一般的なようですが、今日、イランやシリアに武器や軍事技術を提供しているのがロシアであることから、たとえロシアが直接侵略に関わらないとしても、背後の大勢力であることは間違いないといえるようです。「マゴグ」はユダヤ人歴史家ヨセファスによれば、ギリシャ人によって「スキタイ人」と呼ばれた中央アジアに住んだ遊牧民族で、今日、前ソビエト連邦のカザフスタン、ウズベキスタン、トルクメニスタン、タジキスタンの居住地とアフガニスタン北部とみなされます。昨今のロシアの人口統計によると、モスクワの人口一千万人の四分の一がイスラム教徒で、このまま十五年間で40%の割合で急増するならば、2015年までにロシア軍の軍隊の大多数が、若いイスラム教徒によって占められるだろうと言われています。不気味にも、ロシアの人口構成の急激な変化は、ロシアがイスラム教国を率いてイスラエルに侵入する可能性を年々強めているのです。